る矢ノ塚遺跡では、同時期の竪穴住居と掘立柱建物のセット関係が認められるので、西碑殿遺跡の倉庫群は、各単位の生産物や集団の共有物資の備蓄・保管の場と言える。このような集団組織の構造は、弥生時代前期以来少しずつ熟成されていたものと考えられる。

後期後半段階に急速に組織強化が図られるのは、決して外部からの侵略などによって引き起こされた現象ではなく、旧練兵場に居住する集団が積極的に外部との交渉を行い始めたことによると考える。交渉の目的は物資、なかんずくそれまでのサヌカイト石器に取って替わる「鉄」の入手の比重が高いと目される。後期後半から終末期にかけて香色山の流紋岩が砥石として使用され始める。それまでの石器用の砂岩や安山岩の砥石とは異なり、きめが細かく粘りのある石材である。その後少なくとも中世まで砥石石材として使用され続けており、砥石から見ても後期後半の鉄器普及は明瞭である。

6．まとめ

旧練兵場遺跡および善通寺地域の弥生時代の集落構造と社会背景を検討した。旧練兵場遺跡では弥生時代中期から人口の集中がみられ、同じ場所で人口密度を高めながら後期を迎えている。弥生時代後期後半以後の住居の変化や、祭祀具の変化から見て、遅くともその時期から首長権力という古墳時代に続く社会構造の下地が形成され始めていることを想定した。

もっとも、首長の存在を集落内で明確に（直接的に）裏付ける調査資料はまだ未発見である。後期後半～終末期の倉庫群、あるいは各地で見つかっている首長居館とされるような大形建物などが想定されるが、これらの存否の確認は今後の発掘調査の重要な課題である。

ただ古墳時代前期になると、突然集落内の住居が激減する。この要因は明らかではない。居住域の移動かもしれないし、また、すでに労働力そのものも流通する時代である。幅広くその課題を追究していくべきであろう。

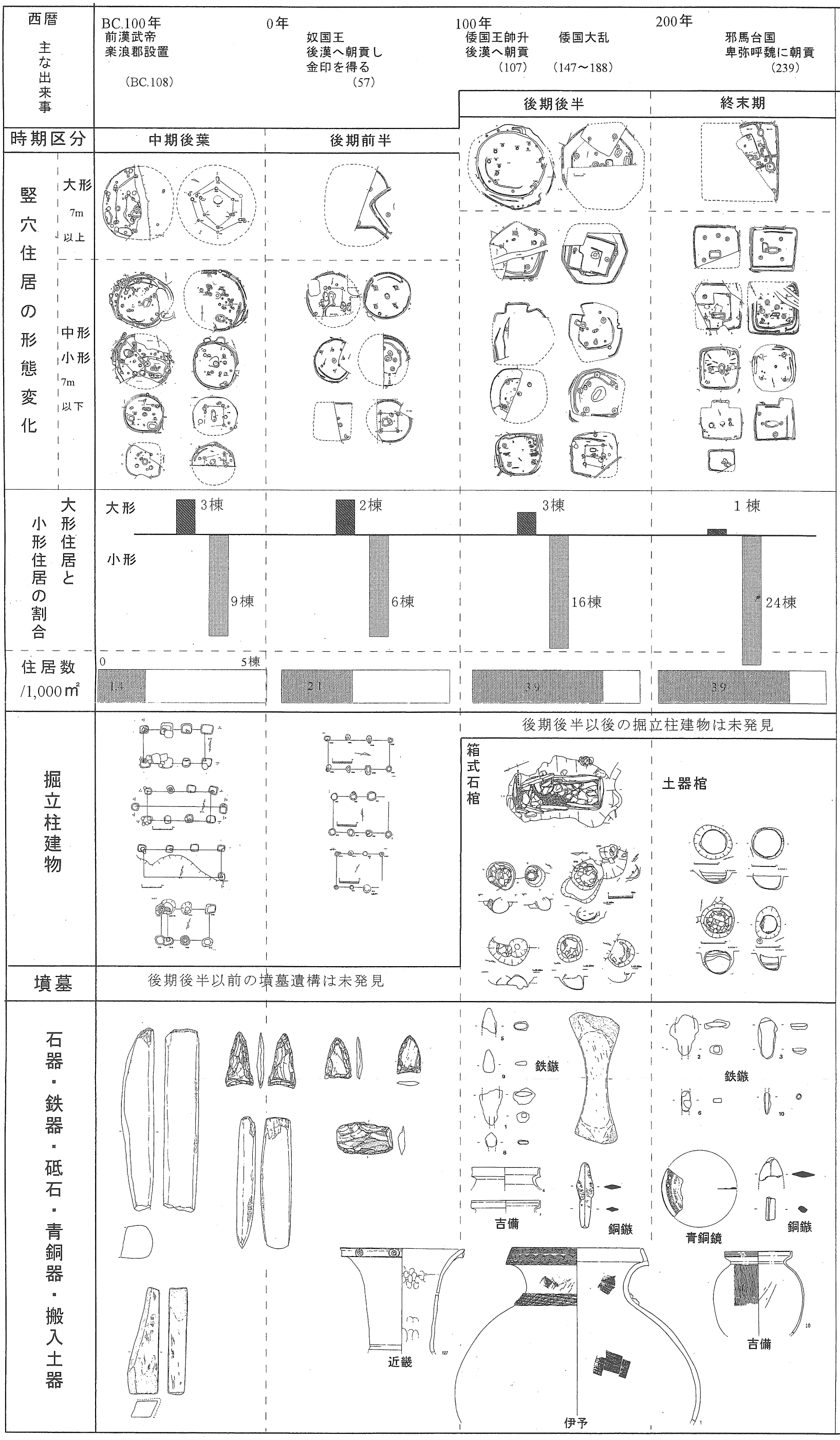
【参考文献】

愛媛大学埋蔵文化財調査室　1998　『文京遺跡シンポジウムー弥生大集落の解明ー資料集』

片山一道ほか　2000　『シンポジウム池上曽根遺跡からの新視点 弥生時代の人・社会・風土』「文部省科学研究費 古人骨と動物遺存体に関する総合研究」シンポジウム実行委員会

考古学研究会　1999　『論争吉備シンポジウム記録１』考古学研究会

森下英治　1999　「讃岐地方における弥生時代中期集落の機能と構造について」『古代学協会四国支部13回大会資料瀬戸内の弥生中期集落ーその機能と構造の研究ー』古代学協会四国支部



竪穴住居の変化

中期後葉から**後期前半**までは，円形の住居が主体。

後期後半には5～8角形の多角形住居が新たに出現し，部分的な張り出し部をもつものもみられる。そのほか，円形・方形の住居もみられ，住居形態が最も多彩な時期。

終末期は一転して，すべて方形の住居となる。大きさも4～5ｍのサイズにほぼ揃う。また，離れた調査区でも住居の方向がほぼ一致する。徹底して規格化が進む。

竪穴住居の大きさ

7ｍを超える**大形住居**は，**中期後葉**から**終末期**まで連続してみられるが，**中小形住居**との比率をみると，**終末期**に急速に少なくなる。

住居の分布密度

1,000㎡あたりに何棟の住居があるか，これまでの調査面積から割り出した数字。**後期後半**から終末期に住居密度が最大となる。

掘立柱建物（倉庫）の消失

中期後半には多くの掘立柱建物が各微高地にみられるが，**後期後半**以後は，これまでの調査では全く掘立柱建物がみつかっていない。

墳墓の出現

箱式石棺は成人墓，土器棺は小児墓。これらは**後期後半**から出現する。しかし**終末期**になると成人墓は遺跡内ではなく，**香色山山頂**や**王墓山古墳下層**など遺跡外で見つかることが多い。

利器の材質転換

中期後半から後期前半までは，サヌカイトの武器や収穫具，石斧などがあるが，後期後半から鉄鏃やヤリガンナなどの工具類が出現する。同時に砥石の石材も，それまでの砂岩や安山岩から，香色山産出と目される流紋岩へと変化する。

搬入系土器

後期前半には**播磨**地方，**後期後半・終末期**には，**伊予**や**吉備**地方と形態がよく似た土器がみられる。地域間の交流が活発になった証拠。**銅鏃**や**青銅鏡**なども，このような地域間交流によって入手したようだ。

Fig.51　SD001黒灰色土層出土石器実測図（1/2）

6. シンポジウムの方針

丹羽佑一

シンポジウム「旧練兵場遺跡を考える」は、シンポの名称として聞きなれた感じがする以上に、これ以外のものは考えられないぐらい適切なものである。ところが少々不思議なタイトルでもある。その理由は、当たり前過ぎて省いた部分があり、しかもそれが、このシンポでも一番大事なものだからである。それは「何であるか」である。旧練兵場遺跡とはいったい何者であるのか、これを考えようというのである。

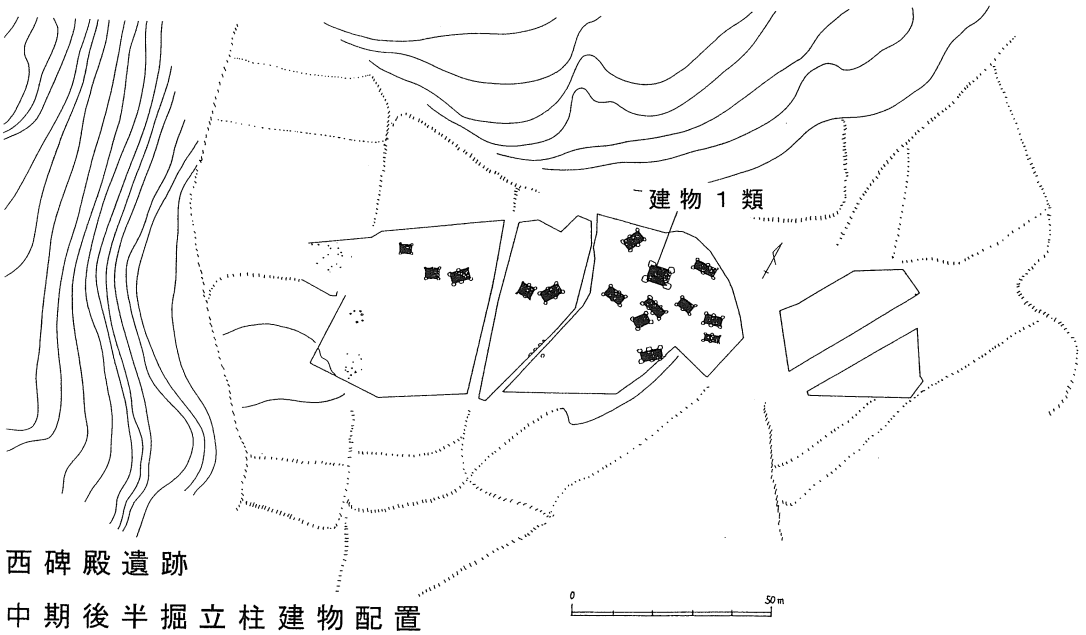
前半の「研究報告」の基調は旧練兵場遺跡、及び関連遺跡・遺物の詳細な報告である。したがってこれは実際に旧練兵場遺跡を発掘調査した研究者、また関連遺跡・遺物を調査した研究者によって行われる。それは旧練兵場遺跡に残された人々の克明な生の記録である。「何であるか」の一面はこの点からまず考えることができる。

ところが一方では，旧練兵場遺跡の人々も私たちと同様に、意識するかしないかは別にして歴史の大きなうねりの中にあった。彼らにとってはそれはクニの形成であった。弥生時代は列島社会史上、まず第一にクニの起源に関わる時代として特徴づけられているのである。中国の歴史書「魏志倭人伝」には邪馬台国を筆頭に３０のクニがあったと記している。それは弥生時代の末期から古墳時代初期の状態と考えられている。

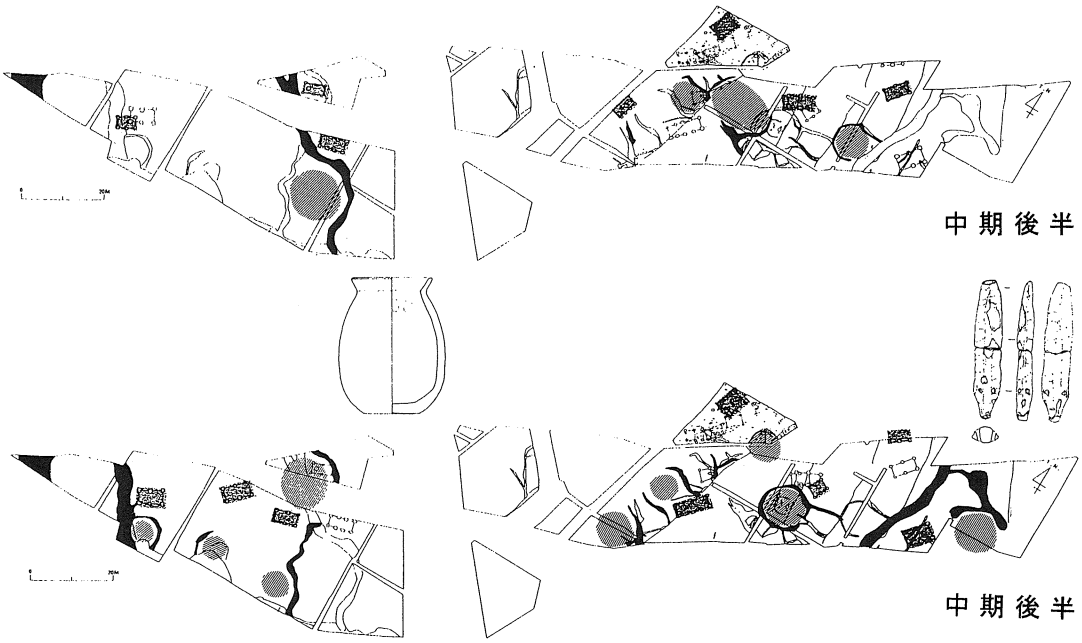
佐賀県の吉野ケ里遺跡、大阪府の池上曽根遺跡、奈良県の唐古遺跡、纒向遺跡等の各地における大規模遺跡の調査・研究は保存・活用の問題とも関連して多分にジャーナリスティックな傾向を帯び、邪馬台国所在地論争に関わることになったが、それゆえに遺跡から具体的にクニを考える研究方向も一方では導きだすことになった。しかしその研究にはいくつかの大変難しい問題が存在することも明らかになった。それは、どんな遺跡、遺物がクニの存在あるいはクニの特徴を示すのかといった点にある。

本シンポでは、国家の3要素、領土を遺跡群の結びつき、人民を密接に結びつく遺跡群の人口に、統治機構を権力者・生産物と流通の管理・司祭者・祭祀者の管理に読み換えて、それが旧練兵場遺跡と関連遺跡の遺物（土器・石器・青銅祭器・鉄器）の生産・流通・機能と遺構（住居・倉庫・墓・水田）の構成・展開・機能、そして遺跡群の構成・展開にどのような形で現れているのかを検討することによって、旧練兵場遺跡の人々はクニに属していたか、あるいは単なるムラ人か。旧練兵場遺跡はクニの一部か、クニの中心か、単なるムラか、つまり旧練兵場遺跡とクニの関係を追求する。これに成功すれば、私たちは旧練兵場遺跡の歴史上の位置を指し示すことが可能になり、同時に旧練兵場遺跡が「何者であるのか」を真に明らかにし得るのである。

参考資料集

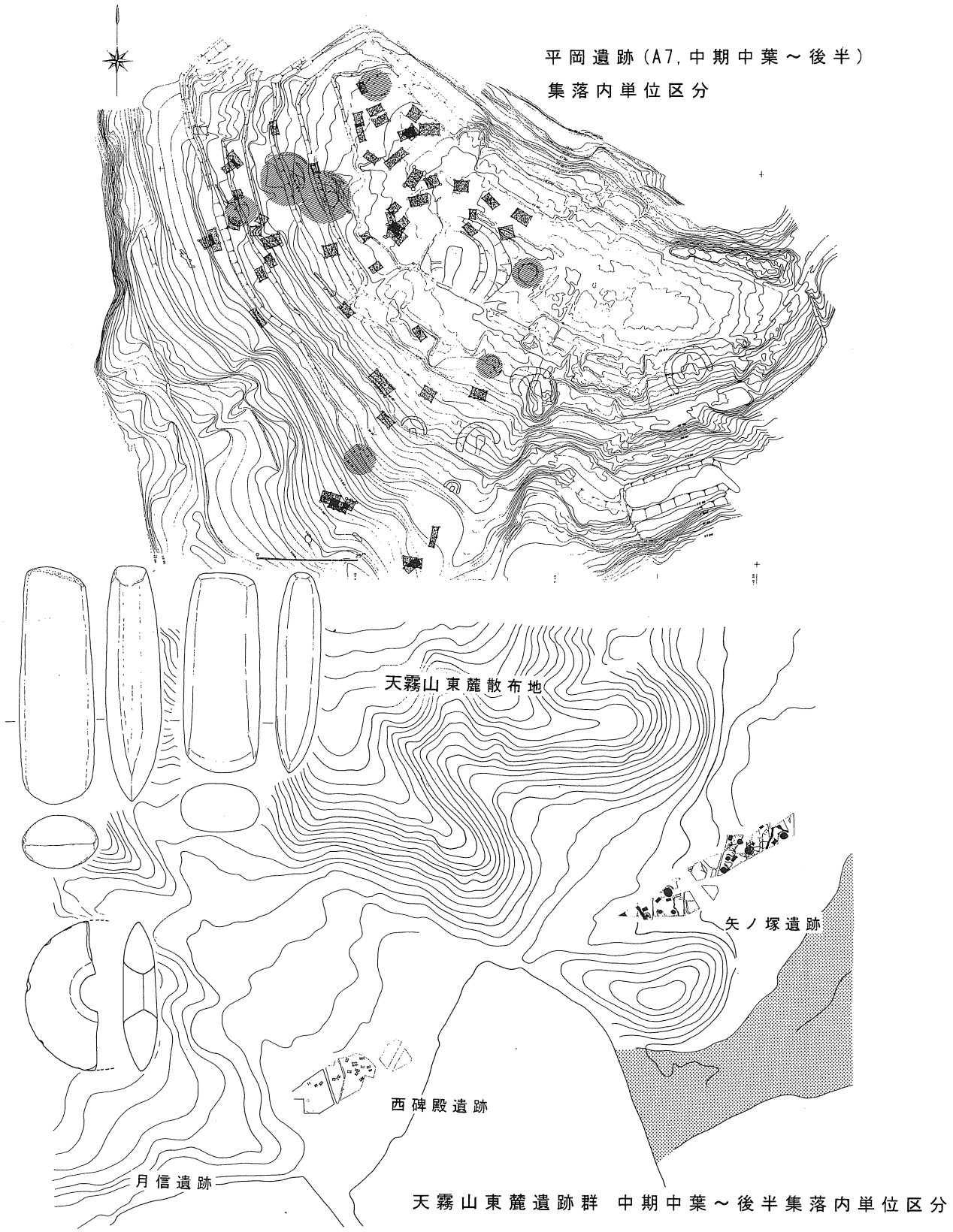


西碑殿遺跡
中期後半掘立柱建物配置



矢ノ塚遺跡　　遺構配置

参考図1


平岡遺跡（A7，中期中葉～後半）
集落内単位区分
天霧山東麓散布地
矢ノ塚遺跡
西碑殿遺跡
月信遺跡
天霧山東麓遺跡群　中期中葉～後半集落内単位区分

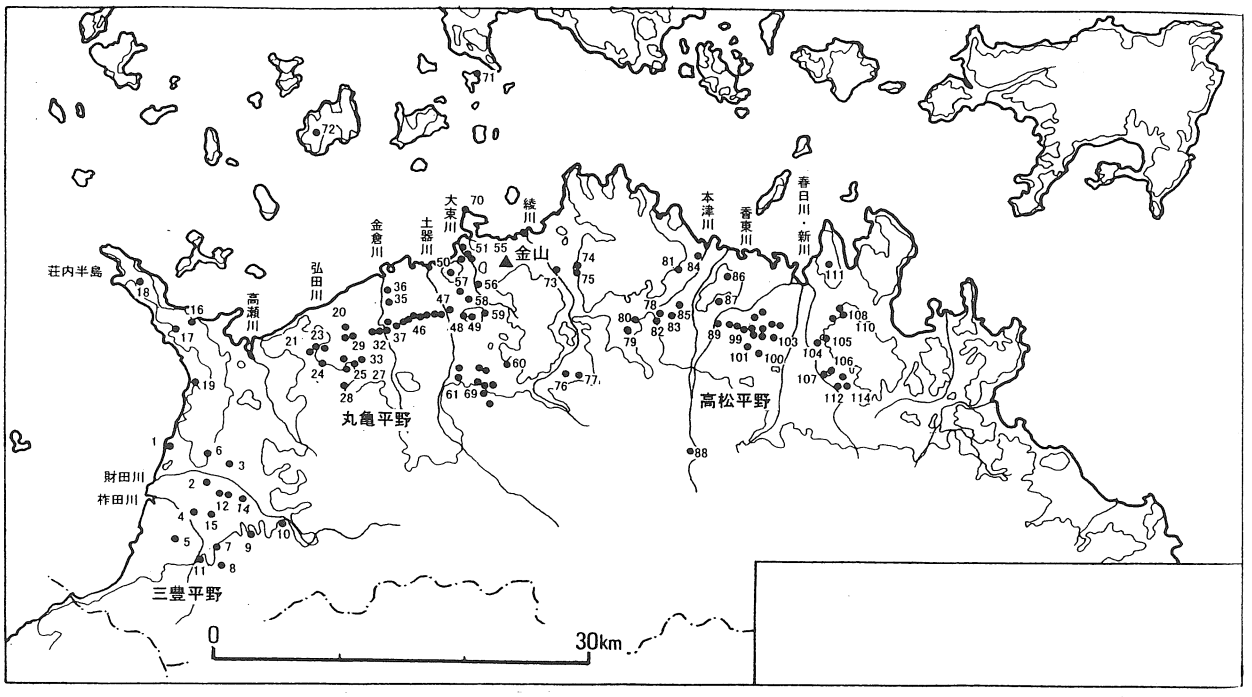
参考図2

番号	調査年度、期間	調査の契機	調査区名	面積	内容	機関	文献
1	昭和58年８月	仲村廃寺範囲確認調査	第１次調査区	1,200	古代末から中世の溝を検出	市教委	1
2	昭和58年11月	仲村廃寺範囲確認調査	第２次調査区		白鳳～奈良時代の瓦を出土する段状遺構を検出。	市教委	1
3	昭和59年４月～昭和60年３月	弘田川河川改修工事に伴う事前調査	（彼ノ宗遺跡）	3,635	弥生中期～後期末の竪穴住居38棟ほか。鏡片、銅鏃、玉類出土。	市教委	2
4	昭和60年７月	個人住宅建築に伴う事前調査	（仙遊遺跡）	135	弥生時代末の箱式石棺墓。蓋石に人面線刻画を確認。	市教委	3
5	昭和63年11月～平成元年３月	仲村廃寺範囲確認調査	仲村廃寺第１次調査区	342	弥生時代後期・古墳時代後期の竪穴住居10棟ほか。	市教委	4
6	同上	同上	仲村廃寺第２次調査区	420	第１遺構面で奈良時代の掘立柱建物、溝。第２面で弥生後期・古墳後期の竪穴住居10棟ほか。	市教委	4
7	同上	同上	仲村廃寺第３次調査区	375	弥生時代の竪穴住居7棟、古墳後期の竪穴住居5棟及び総柱建物跡1棟	市教委	4
8	昭和62年３月	下水道工事に伴う事前調査		22	弥生中期後半の竪穴住居、柱穴等	県教委	5
9	平成３年９月	四国農業試験場施設整備に伴う試掘調査		146	弥生時代の竪穴住居、柱穴、溝等を検出。	県教委	6
10	平成４年５月	四国農業試験場研究情報センター建設に伴う試掘調査		66	弥生時代～古墳時代の竪穴住居4棟、土坑、柱穴等を検出。	県教委	
12	平成４年４月	国立善通寺病院サービス棟建設に伴う立会調査		41	古墳時代後期の竪穴住居、平安時代の溝、弥生～古墳の土器溜まり等	県教委	7
13	平成５年５月	国立善通寺病院保育所新築工事に伴う事前調査	保育所調査区	305	弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居14棟を検出。	県教委	8
14	平成５年９月	四国農業試験場パイプライン設置等工事に伴う試掘調査	１Tr. ～30Tr.	70	敷地西半を中心に弥生時代～奈良時代の遺構の所在を確認。	県教委	
18	平成５年10月～平成６年３月	国立善通寺病院看護学校教場棟増築工事等に伴う事前調査	水道管調査区	100	弥生時代前期末の貯蔵穴２基、後期の竪穴住居４棟等などを検出。	県教委	8
19	同上	同上	下水管調査区	120	弥生時代前、後期の竪穴住居５棟、溝、中世の溝などを検出。	県教委	8
20	同上	同上	看護学校調査区	150	弥生中期～後期の竪穴住居９棟、古墳中期の掘立柱建物など	県教委	8
21	平成６年４月	四国農業試験場品質管理実験棟建設に伴う事前調査		120	弥生後期の竪穴住居２棟、掘立柱建物１棟、古墳後期の竪穴住居１棟	県教委	9
22	平成６年12月	四国農業試験場パイプライン設置等工事に伴う事前調査		100	トレンチ調査。弥生時代から中世に至る遺構・遺物を検出。	県教委	9
23	平成７年４月～９月	弘田川河川改修工事に伴う事前調査	弘田川西岸遺跡	6,390	弥生時代の竪穴住居62棟ほか、縄文後期～中世の遺構・遺物	(財)県埋文センター	10
24	平成７年４月～６月	国立善通寺病院研修棟整備工事に伴う事前調査	研修棟調査区	690	弥生中・後期の竪穴住居12棟ほかを検出。	県教委	11
26	平成７年11月	四国農業試験場タンパク機能解析実験棟建設に伴う事前調査		100	弥生時代後期の竪穴住居２棟及び掘立柱建物、溝等を検出。	県教委	12
27	平成８年10月～平成９年９月	国立善通寺病院看護学校等建設に伴う事前調査		6,000	弥生中期、後期の竪穴住居ほか、古代の溝状遺構ほかを検出。	(財)県埋文センター	13
29	平成９年10月	国立善通寺病院看護学校雨水排水管建設に伴う事前調査		30	古代の旧河道を検出。	県教委	本書

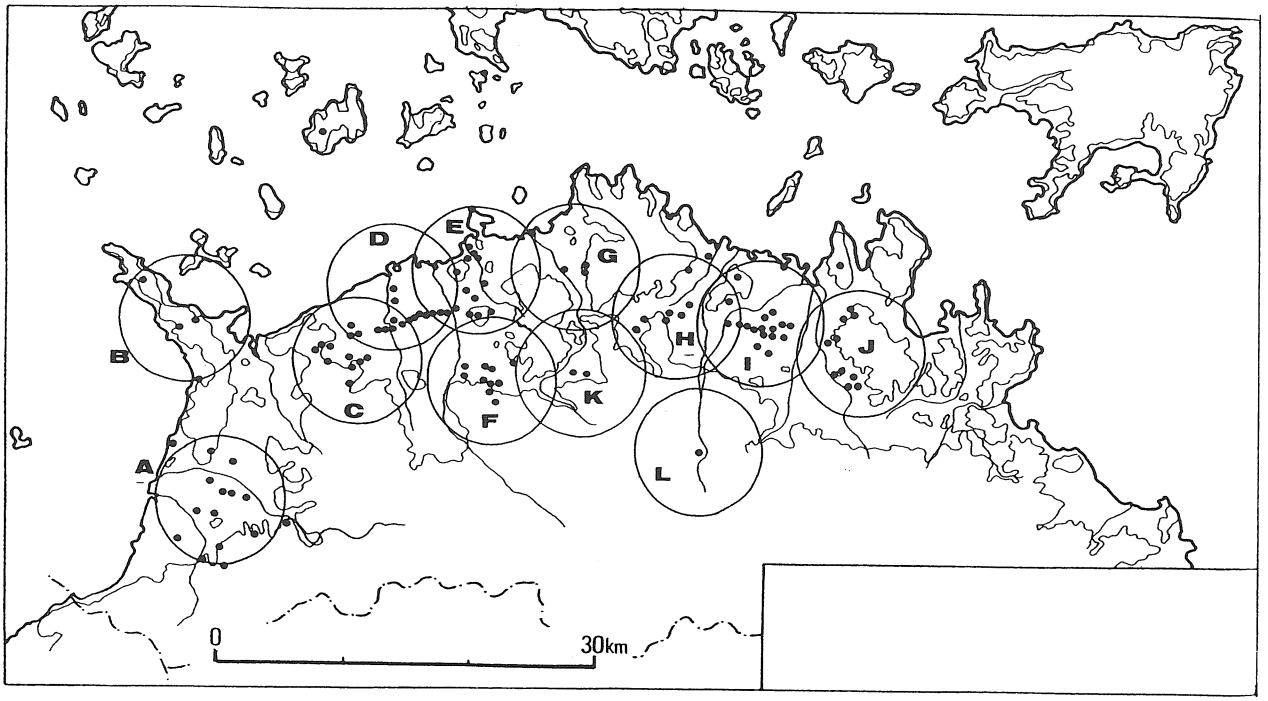
文献
1　善通寺市教育委員会　「仲村廃寺発掘調査報告書（旧練兵場遺跡内）」1984
2　善通寺市教育委員会　「彼ノ宗遺跡～弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告～」1985
3　善通寺教育委員会　「仙遊遺跡発掘調査報告書～旧練兵場遺跡仙遊Ⅰ地区」1986
4　善通寺市教育委員会　「仲村廃寺～旧練兵場遺跡における埋蔵文化財確認調査報告」1989
5　香川県教育委員会　「香川県埋蔵文化財調査年報　昭和59年度～62年度」1988
6　香川県教育委員会　「香川県埋蔵文化財調査年報　平成３年度」1992
7　香川県教育委員会　「香川県埋蔵文化財調査年報　平成４年度」1993
8　香川県教育委員会　「旧練兵場遺跡ー平成５年度国立善通寺病院発掘調査報告」1994
9　香川県教育委員会　「旧練兵場遺跡Ⅱー平成６年度四国農業試験場内発掘調査報告」1995
10　（財）香川県埋蔵文化財調査センター　「弘田川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　弘田川西岸遺跡」1996
11　香川県教育委員会　「旧練兵場遺跡Ⅲー平成７年度国立善通寺病院内発掘調査報告」1996
12　香川県教育委員会　「旧練兵場遺跡Ⅳー平成７年度四国農業試験場内発掘調査報告」1996
13　(財)香川県埋蔵文化財調査センター　「国立善通寺病院看護学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　第１冊　旧練兵場遺跡」1997「　同　第２冊」1998

旧練兵場遺跡　主要調査一覧表

参考表1



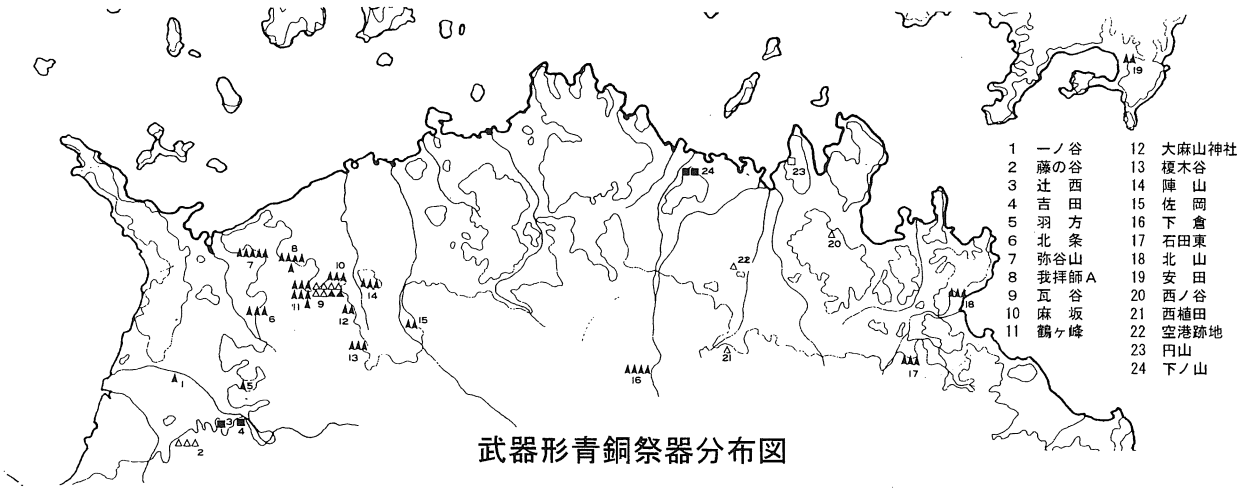
参考図3　香川県（高松平野以西　前期～後期）弥生時代遺跡分布図



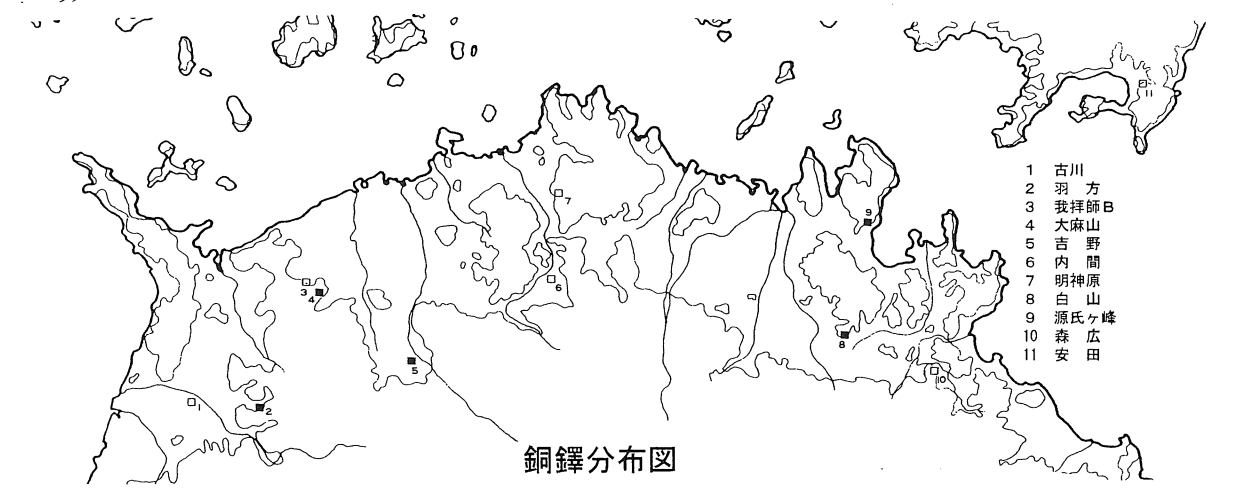
参考図4　地域区分（高松平野以西）

エリア	平野・水系	拠点集落	高地性集落	武器型青銅祭器 中細以前	武器型青銅祭器 中広以後	銅鐸 扁1以前	銅鐸 偏2	中期～後期前半出土金属器	その他の金属器（後期後半・古墳出土や時期不明を含む）
				模倣品等関連遺物		模倣品等関連遺物			
A	三豊 財田川・柞田川水系	一ノ谷→？	？	3	4	1	1	棒状鉄器（平岡）	鏡片（一ノ谷） 方格規矩鏡（鹿隈墳墓群）
B	三豊 荘内半島	？→？	紫雲出山（352）	0	0	0	0	棒状鉄器（平岡）・釣針 板状鉄斧他（紫雲出山）	
C	丸亀 弘田川水系	旧練兵場	？	6 剣形土製品（彼ノ宗） 銅剣形石剣（弘田川）	33	1 銅鐸形土製品・小銅鐸（弘田川）	1	板状鉄斧（矢ノ塚）	無文土器系（矢ノ塚） 方格規矩鏡（甲山北・稲木） 小形ﾎﾞｳ製鏡（彼ノ宗・ｷｯﾁｮ塚）
D	丸亀 金倉川水系	中の池	―	0	0	0	0	青銅鋤先（平池南）	
E	丸亀 大東川下流域	下川津→西又	青ノ山山頂（225） 飯野山山頂（422）	0	0	0	1		漢式三翼銅鏃（角山東麓） 方格規矩鏡（下川津）
F	丸亀 大東川上流域	行末→池下？	？	0	2	0	1	鋳造鉄斧（次見）	
G	丸亀 綾川下流域	本鵜→？	烏帽子山（263） 城山（462）	0	0	1	0	板状鉄斧（烏帽子山）	方格規矩鏡（快天山古墳）
K	丸亀 綾川上流域	？→陶畑 田村神社？	堤山（201）	0 石戈（陶）	0	1	0		
H	高松 本津川水系	（西打？）→？	？	0	0	0	0		
I	高松 香東川下流域	汲仏→多肥→上天神	摺鉢谷（140）	1 武器形木製品（多肥）	2	0	0	板状鉄斧柄（井出東） 袋状鉄斧柄（多肥）	板状鉄斧（三谷三郎池） 方格規矩鏡（鶴尾神社４号墳） 異体字銘帯鏡（猫塚） 小形ﾎﾞｳ製鏡（居石）
L	高松 香東川上流域	？→岡清水	？	0	4	0	0		
J	高松 春日川・新川水系	農学部→鹿伏中所 前田東	白山山頂（203） 屋島山頂（292）	2 磨製石剣（白山）	0	0	2	鉄小刀（鹿伏中所） 鉄挺・袋状鉄斧・ﾔﾘｶﾞﾝﾅ他（久米池南）	
合　計				12	45	3	6		

参考表2　エリア別集落内容集計



武器形青銅祭器分布図



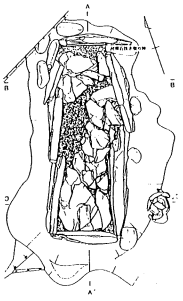
銅鐸分布図

参考図5

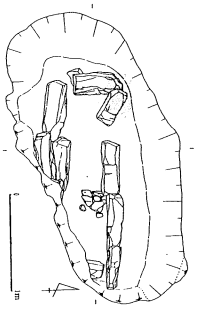
旧練兵場遺跡周辺の集団墓検出例（弥生時代後期）

遺跡の配置（1／50000）

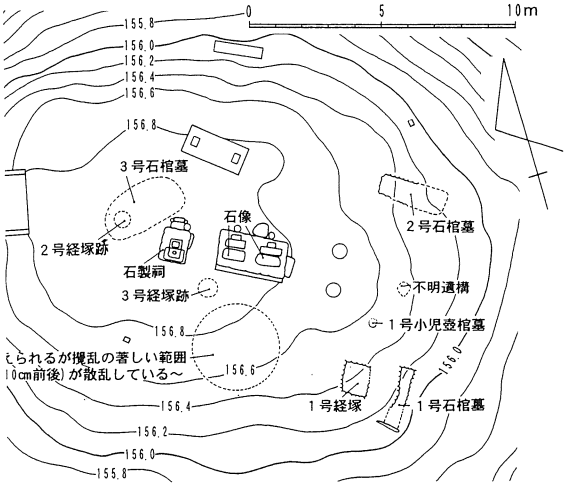
※うち1基（きっちょ塚）から仿製内行花文鏡が出土）



仙遊遺跡石棺

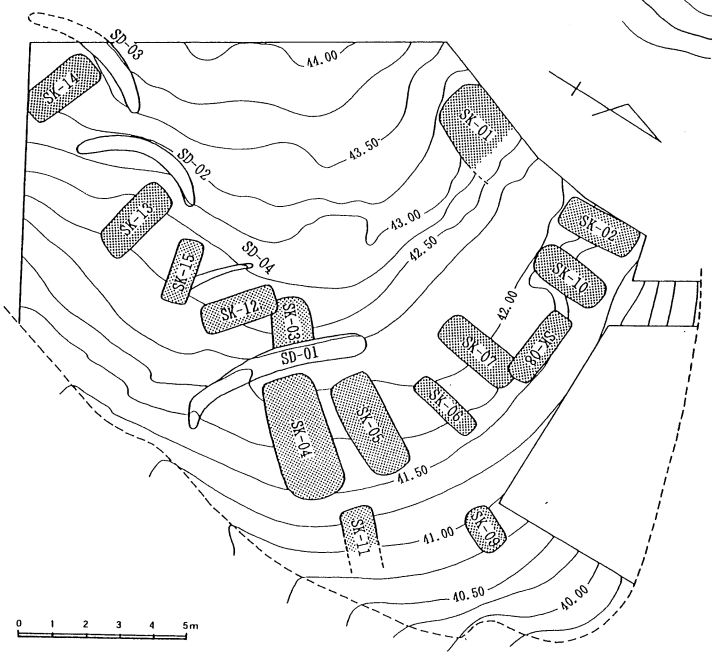


香色山3号石棺墓

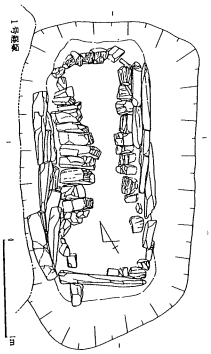


② 香色山山頂遺跡遺構配置図

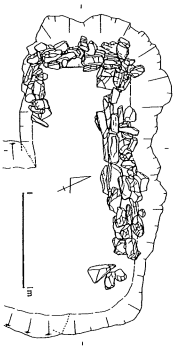
（3基の石棺墓と1基の壷棺墓）



③ 王墓山遺跡遺構配置図　（15基の石棺墓と土壙墓）



香色山1号石棺墓



香色山2号石棺墓

参考図6

シンポジウム

総合司会　　只今より、旧練兵場遺跡のシンポジウムを開催させていただきたいと思います。まずはじめに、香川大学経済学部教授の丹羽佑一先生から旧練兵場遺跡、そしてシンポジウムの方針、趣旨について解説をお願いいたします。

丹羽　　今、ご紹介にあずかりました香川大学の丹羽と申します。よろしくお願いいたします。善通寺市と申しますのは、県内でも遺跡の整備、とりわけ史跡の整備がもっとも進んでおる地域です。その内のひとつの遺跡、今日は、旧練兵場遺跡でありますけれど、こういう遺跡に関わるシンポジウム、討論会は催されたことは県内でも初めてでございます。考古学を研究する者にとりましては、今日のこのような催しは非常に嬉しく思っておるところでございます。そういうことで、こういう機会をもたしていただきました善通寺市に心から御礼申し上げるしだいでございます。

これから、「旧練兵場遺跡を考える」ということでシンポジウムを行うわけですが、このシンポジウムのタイトルはよく「何とかを考える」ということで非常に聞き慣れた言葉なのでありますけれども、わかったようでわからないとこがございます。それは何を考えるかという、その「何を」がこのタイトルではわからないわけでございます。もちろんここではその旧練兵場遺跡が何であるのか、何ものであるのかということをいろいろ考えようということでございます。

じゃあどう考えるのかと、それについて先ほど研究報告がありました。これは、旧練兵場遺跡および関連する遺跡や遺物の詳細な報告が基本になっておりました。したがいまして、報告者は実際に旧練兵場遺跡、その関連遺跡、遺物を調査研究された方が行ったわけでございます。いわばこの研究報告というものは、旧練兵場遺跡に残された人々の生の克明な記録であるということでございます。これも又、旧練兵場遺跡が何であるかということの一面を考えることになるわけでございます。ところが、私たちもそうでありますけど、旧練兵場遺跡を残した人々も当時の歴史の大きなうねりの中にあったわけでございます。それは、意識するにせよしないにせよそうであったわけでございます。当時の大きなうねりというのは、弥生時代のことであり、クニの形成ということでございました。弥生時代というのは、日本列島の社会史上クニの起源に関わる時代として特徴をもっているわけでございまして、実際当時のクニについては、お隣の国、中国の『魏志倭人伝』に30国のクニが日本列島にあったというふうに記録されているわけでございます。これはちょうど、弥生時代の終わりから古墳時代の初め頃の状態を記したものでございます。そのクニの形成に関わって旧練兵場遺跡の人々は、どのような生活をしていたのかということが旧練兵場遺跡が何であるかということを考えるいま一つのポイントになるわけでございます。

ところで、佐賀県の吉野ヶ里遺跡あるいは、大阪府の池上曽根遺跡、奈良県の唐古・鍵遺跡それから愛媛県松山市の文京遺跡等、日本各地の代表的な弥生時代の遺跡につきましては、保存問題、保存した後の活用の問題ということに関わってその調査研究というのは、非常にジャーナリスティックな面をおびたわけでございます。具体的に申しますと邪馬台国の所在地論争に関わっていたわけでございます。しかし、一面では遺跡からクニについて考えるという研究方向を導き出したわけであります。その過程で遺跡・遺物からクニをどのように把握するのか、大変難しい問題が出てきたわけでございます。

本日ここでは、どのようにしてそのクニを遺跡・遺物に求めるのかという基本的な考え方を、シンポジウムの方針としてここに述べさせていただきたいと思います。国家というのは、どの辞書を見ましても3つの要素から成り立っているものだといわれております。それはまず、人民がいるということ、人民のいない国家というのは

ありません。それから、人民の住まう領土。歴史上、国家ということが問題になるとき、他国との境界、それが問題になってくるわけなんですけど、その領土という問題です。それから、その領土に人民をコントロールする、生活をまとめていくような統治機関、あるいは統治機構また権力者というふうに呼びかえてもいいと思いますけれども、そういうものの存在が必要です。これが3つの要素でございます。この3つの要素のうち領土の問題を考古学では、旧練兵場遺跡では具体的にどう考えるのかといいますと、旧練兵場遺跡と密接な結びつきをもつ遺跡群、その広がりを領土を考えるうえでの検討対象にしようということです。それから、人民はどうするのかというと、密接に結びつく遺跡群の人口を検討対象にしようということです。最後に残りました統治機構でございますが、これは権力者，生産物と流通の管理，司祭者（お祭りを行う人）またその祭祀の管理、それがどのように行われているのかということを検討する中で考えていきたいと思っております。具体的には、旧練兵場遺跡と関連遺跡の遺物，中でも土器，石器，青銅祭器，鉄器の生産と流通、それから住居や倉庫、墓や水田という遺構としてあらわされるものの構成・機能、また遺跡群の構成、歴史的な展開、つまり遺跡と遺跡との結びつきの対応というものを領土、人民、その統治機構というものを検討する対象として考えていきたいと思っています。長くなりましたが、これより約1時間位今申しましたような方法でシンポジウムを行っていきたいと思います。

私たちも、日本の国がどんな国かと聞かれたらなかなか答えにくいわけでございます。今、答えにくいぐらいですから弥生時代、どんなクニがあったか、そのクニがどんな内容であったのか難しい問題であります。古墳時代になりますと、その地域地域のクニの様相が明らかになってまいります。それは、先ほど申しましたクニの3つの要素、その一つであります権力、人によります権力のありかたがはっきりしてくるわけでございます。古墳時代は皆さんもよくご存じのように、前方後円墳という古墳が日本各地に作られてくる時代です。香川県は、四国で最も前方後円墳の数がたくさんあるといわれています。その中でも善通寺一帯は、前方後円墳が早くからそして一番後まで作り続けておった地域です。この前方後円墳というのは、それぞれの地域の最高政治権力者いわゆる大豪族の長ですね。あるいは、魏志倭人伝ふうに言いますとクニの王ということになりますが、そういう位置にある人々だけが可能であった墓ですから、前方後円墳、これの展開を考えることによってクニの分布ということを考えることができるといわれています。そこでこの善通寺市を中心として、丸亀平野一帯の前方後円墳の展開、それを最初に検討し、そこから古墳時代の初期でありますけれども、クニの分布というものをさぐってみたいと思います。これに関しましては、先ほどの研究報告でも善通寺の原始古代の流れを発表していただきました笹川さんにお願いしたいと思います。

笹川　今、丹羽先生からお話がありましたように弥生時代はなかなか捉えにくいものですが、先ほど私のスライドのところでご説明しました旧練兵場遺跡に住んでいた人たちが墓域として有岡のあたりを選んでそこに古墳を作り続けています。同じように他の地区でも前方後円墳のまとまっている所については、それぞれの地域にまた別の集団がいたのではないかという考え方もできると思います。丸亀平野なんですが、ちょうど善通寺のあたりに前方後円墳が集中しております。他の地域にも前方後円墳がみられる場所があります。作られている場所は山になります。それぞれ丸亀平野の縁辺部で、それについて図示しながら説明します。古墳時代というのは、歴史の上でも習いますようにクニが統治国家となった、全体が1つのクニになったといわれていますが、その前の古い段階をみていこうかと思います。ここに香川県の地図が載せてあります。赤い丸の部分が善通寺のエリアになります。これが多度津白方あたりのエリア、こちらが丸亀から坂出のエリア、これが羽床のあたりのグループをそれぞれ示しています。この資料は、かなり以前に香川県で日本考古学協会の大会があり、その時のテーマが香川県の前期古墳でしてその時に作られた資料を探してまとめてコピーしてあります。それぞれの場所を拡大しておみせします。まず善通寺のあたりですが、前方後円墳がここから菊塚、王墓山、丸山古墳、鶴ヶ峰古墳群、磨

臼山古墳と並びます。又、非常に古い時期の古墳というのが野田院古墳をはじめ、大麻山の椀貸塚、このあたりに集中しているのがわかります。かなりの数の前方後円墳がありますが、これをちょうど旧練兵場遺跡あたりを中心としたグループが作ったのではないかと先ほど申しましたが、同じように多度津のあたりをみますと、こちらの白方の山のあたりにいくつかの前方後円墳はじめ、それに続く古墳がみられます。そうするとこのあたりにもひとつのまた小さな別勢力がいたのではないか。丸亀平野の東の方になりますけれど、坂出の奥の方のグループというのは、また別のグループとしてみれると思いますので丸亀平野の縁辺部として捉えますと、丸亀でも青の山グループ、青の山には吉岡神社古墳という非常に古い古墳がありますし、聖通寺山のあたりにも積み石を重ねた石塚を含めて古い古墳があります。宇多津のエリアからずっと南の方へ下がった羽床盆地のあたりにも快天山などをはじめとします前方後円墳群が知られています。古墳時代に入りますと4つのグループ分けができるようにもともとその基盤になった弥生時代のころから何らかの勢力分けといいますか、全く別のものである可能性もありますけど、その4つそれぞれが1つのグループにまとまって何らかのクニといえるかどうかわかりませんが、大きな集団になっていった可能性も考えられます。こういったことが前期古墳の分布から言えるのではないかと思います。

丹羽　ありがとうございました。前期古墳の前方後円墳の展開をみますと丸亀平野の4隅の山の上に一つずつ前方後円墳群が存在すると、こういうことでございます。先ほど申しましたように、前方後円墳に葬られる人というのはその地域の最高政治権力者、その地域を統括する人であったわけです。そういうことになりますと、単純に考えますと丸亀平野は、4つの地域社会に分かれていった。そしてそれぞれを統括する権力者がいたということになるわけです。丸亀平野に限定しますと、これが、古墳時代に考えられる最も大きい地域社会であります。これは、我々が今日でいうような国、国家という規模からして全然違うわけですけれども、おそらくクニの3要素はみたしているように思うわけです。古墳時代前期の段階がこのようなことでありますから、これをさかのぼる弥生時代の我々が想定するクニというのもそんなに大きいものではなかったように思われます。しかし、あるいは弥生時代から古墳時代に移るときにもともと大きい地域的なまとまりのあったものが、ある強制力によって、対外的な力によって4つに分けられたということがあるかもしれません。これからまず、古墳時代にこういう地域社会のありようをさかのぼって、これが弥生時代からどのようにして形成されていったのか。その地域形成のプロセスをみてみたいと思います。ひとつ言い忘れましたが、この4つの地域を統括するような王のなかの王とでもいうようなものがありうるかどうか検討させていただきたいと思います。森下さんこれについてどうですか。4つのグループがありますよね。4つに政治権力者を想定することができるわけなんですけど、更にそれを束ねるような者がこのグループのなかの権力者に求められるかどうか。

森下　それは、今ある古墳からみてという話でしょうか。

丹羽　そうです。

森下　そうなってきますとかなり難しいと思います。時期がもう少し下らないとこの地域全体を統括するのは、難しいのでなかろうかと思います。大川町富田茶臼山古墳のように巨大な前方後円墳もありますけれど、だいたい100年位後になってこようかと思うのです。その時期以後、決して固定的なものではないのではないかというふうにも思います。もうひとつ言わせていただきますと、先ほど4分割というお話がありましたが、はたして善通寺というものが全部ひとつにまとまっているのかというと、たとえば野田院古墳があり、南の方には丸山古墳という前方後円墳があります。それがひとつにまとまっているかどうかというのも、まだちょっとわからないかなと思います。

丹羽　それは地域を統括する権力者ですね。その系統が複数あって、世代によって交代していくというのでは

なくて、地域社会もまたそれぞれ分かれておるということ、そういうことも考えられるということですね。

森下　　それも考えられると思います。

丹羽　　初めからいろいろ意見があってすんなり弥生時代に移れないかもしれませんが、古墳時代は少なくとも、大きく分けて4つの地域社会に分かれておったというところで、それがどう弥生時代の歴史の中で形成されていったのかということをみていきたいと思います。弥生時代は大きく前期、中期、後期に3分割されております。さかのぼってということになりますと、話は次に後期ということになるわけですが、歴史というのは古いところから新しいところへいくわけでありますから、前期から始めてみたいと思います。前期の旧練兵場遺跡を中心にする丸亀平野の社会についてでありますが、それを考える上で1つポイントになる遺跡がございます。それは、先ほども森下さんから日本各地の大きな集落を紹介していただいた時に濠を持つ集落、いわゆる環濠集落というのがあるという発表がありましたが、丸亀平野でも前期の後半以降にその環濠集落が形成されます。一方では、濠を持たない集落もあるわけでございます。こういう展開を地域的な遺跡群のまとまりということからみると、どういう関係がいえるのかということです。重なって申し訳ありませんが、森下さんの方から、環濠集落と濠を持たない集落、その関係とりわけそのつながりがあるかないか、あるとすればどういうつながりかというようなことをお話いただければと思います。

森下　　時間的な流れからご説明します。まず弥生時代の前期、紀元前3～4世紀位と言われておりますけれども、弥生時代前期の段階で香川県の遺跡は結構ございます。発掘調査をされている遺跡を見ますと、ほとんどが環濠集落なんですね。集落の周辺に溝を持っている。先ほど旧練兵場遺跡は、集落をとりまくような環濠はありませんよという話をしました。実は環濠がある集落というのは、香川県の場合ほとんど弥生の前期の段階に限られます。前期の前半の終わりごろから環濠集落がでてきまして、中期の初め頃までそれが続きます。その後、環濠は使われなくなってすぐ埋まってしまうという、それでも集落域はその場で存続する場合もありますし、集落が移動する場合もあります。いずれにしましても次に出てくる中期の集落というのは、環濠を持たずにその面積がだんだんと大きくなってくる拡大傾向にあるといったことが指摘できようかと思います。ですから、持つ集落と持たない集落というものを今、比較するということはできないのですが、時間的な関係で言えばそういうことになります。大きさの話をすれば、私のレジメの3図19を見ていただきたいのです。拠点集落の規模の比較という図面をいれておりますが、この図の左下側に板付遺跡という福岡県の弥生前期の遺跡の図面を小さく入れています。これは、スケールをあわせています。面積は、0.67haで、香川県の前期の環濠集落もだいたいこの位の大きさです。中期の段階になってきますと、もっと規模が大きくなってきます。

丹羽　　ありがとうございました。現在のところ丸亀平野では、その同時期の環濠集落とそういう施設を持たない集落との関係というのは、関係を検討する程の資料が整っていないということで、むしろ環濠を持つ集落から環濠を持たない集落へ変わっていくという、それは集落の拡大によって溝が埋められたというかたちで進められたようであります。お聞きしたいのですが、旧練兵場遺跡も弥生時代のこのたびの調査で前期の段階から始まったということですが、当時の丸亀平野の弥生時代前期の遺跡の分布というのに偏りはございますでしょうか。

森下　　これは図面がありますので見ていただきたいのです。図17になります。信里さんが作られた図面なのですけれども、この図面の中で旧練兵場遺跡が1番です。弥生時代前期の遺跡は、その北側に稲木遺跡があります。それから4番の永井遺跡、そのほか三角形の印のついているのが弥生時代前期の遺跡です。近くとしてはそのようなものがあるのですが、もう1つ特徴的なのは、その東側に金倉川という川が流れています。満濃池から出てきている川なのですけれど、その東側の岸に高速道路で調査された23番の龍川五条遺跡、22番の五条遺跡、さらに北上しまして20番、19番、18番これが中の池遺跡、あるいは平池南遺跡、更に北側の道下遺跡、ここまで弥生

時代前期の遺跡が続いております。このように丸亀平野のどちらかというと真ん中の、河川沿いにその時期の遺跡が分布しております。

丹羽　丸亀平野の中央部が弥生社会の中心であったということが、遺跡の分布から見受けられるようであります。そういう展開に対して旧練兵場遺跡はどうであったのか。先ほど角南さんから報告がありましたが、もう一度同時代の旧練兵場遺跡の様子について出土遺物、遺構等からお話していただければと思います。

角南　私が調査させていただいた地区から、古い段階の弥生時代前期の土器や石器が出ているのですけれども、これは明確な遺構に伴ったものではありませんで、中期の溝よりも下に堆積した地層の中にあるという程度しか言えません。この土器は、いわゆる遠賀川式土器が広く香川で作られる前の段階、坂出の下川津遺跡という所で下川津中層といわれている一番古い段階のまとまった資料によく似ているものなのです。皆さんが弥生時代前期の遠賀川式土器というものをイメージされると思うのですが、それより少し前の段階の資料が今回出ているということです。それから、信里さんの発表にもありましたように遠賀川式土器は、旧練兵場遺跡の中からも出土しているのですけれども、明確に遺構に伴った資料というのはほとんどないようです。

丹羽　ありがとうございました。

信里　丸亀平野における弥生時代前期の環濠集落と旧練兵場遺跡との比較について、僕の持っているイメージを少しお話させていただきたいと思います。これまで確認されている丸亀平野の前期の環濠集落に五条遺跡・龍川五条遺跡・中の池遺跡などがあります。これらの環濠内部の遺構密度は、中期段階の旧練兵場遺跡と比較してあまり濃いとは言えません。具体的に言えば、住居が5,6棟と他の建物が若干あるくらいだと思います。また、このような環濠集落が比較的近いエリアに共存する状態にありまして、中期段階の旧練兵場遺跡のような集落よりはあまり拠点性を持ってないのではないかと思います。加えて環濠を集落の周辺に掘削している理由は拠点性以外に、何か社会的要請があったと思います。

丹羽　前期のいくつかの環濠集落、そういうものはそんなに地域の拠点的なものではなくて一般的なもの、そういうありかたに対して旧練兵場遺跡の中期遺構の集落というのは、環濠集落がいくつか入ったもの、集まったものだということですね。

信里　まだ実証的な作業は完了していませんが、だいたいそういったイメージを持っています。これからは具体的に、前期段階の一般的な居住域の大きさや集落構成を把握し、中期段階の旧練兵場遺跡のそれと比較することや、出土遺物から具体的に丸亀平野の集落動態を把握する段階に来ていると思います。

丹羽　そういう見方からしますと、旧練兵場遺跡というのは前期におきましては、弥生社会の中心はその平野の中央部にあってその周辺の一つのムラ、それもあまり大きくない一般的なムラであったというふうな位置づけになると思います。ただ、それが今お話しされましたように中期になりますと、大規模なものになっていくわけであります。そこで、どうしてそんなふうになったのかということも当然考える必要があるのですが、その前に中期の遺跡の展開、旧練兵場遺跡を中心とする遺跡の展開を、前期と比較するうえにおいてもみておきたいと思うわけであります。

笹川　中期になりますと、とにかくまず旧練兵場遺跡を中心に広がっています集落域というのは、遺構面、今捉えてる複合した遺構面の中で1番古いものを見ていきますと、全部中期になってくるわけなのです。また、信里さんの方からありましたけれども、中期にここに周りから入り込んでくるようなかたちで急激に人口がたくさん増えておりますし、それはやはり周辺部からの一カ所への集中とみたほうがいいかもしれません。また、その時期には旧練兵場遺跡だけではなくて、例えば善通寺の碑殿近く、碑殿から南の方の三井江付近の山の上の曼荼羅寺の周辺、山の丘陵部にも同じ時期の集落といいますか、たくさんの遺物、遺構の出現が認められます。これ

が大きな一つの特徴だといえます。それと前期の集落、平野の中央部にあったものが、わりとこの善通寺の旧練兵場遺跡だけではなくて、その他のところでも平野部の中央部にあったものが、中期から平野の縁辺部に移動して、そのあと縁辺部におちついて、また集落を営んできている傾向がみられると思います。中期の話からまたそれるかもしれませんが、前期の遺構というのは、平野部の中でもそのうえにあとの時代の堆積物が多いようなところにありまして、ただたんに移動したというわけではなくて、そこに大きな気候の変化なり地球に左右されるような、そういったものが影響したのではないかと考えています。先程、角南さんの方からご紹介のあった調査区でも厚いシルト層、弥生時代中期以降の遺構面がのっているその下のぶ厚い土砂の堆積の下から、弥生時代前期のものが出てきていますので、わりと大きな気候の変動のようなものが手伝って人達の移動が促進されたのではないかという気もしています。

丹羽　ありがとうございました。中期は、前期の丸亀平野における社会のありかたがよほど変わったということが考えられるわけであります。丸亀平野の弥生社会の中心は、中心部ではなくその縁辺部に移っていったということでございます。その一つがこの旧練兵場遺跡ということであります。先程の、中期における大発展というのは、旧練兵場遺跡における全体のありかたを反映したものということになるわけです。その中央部も、なおムラは存在したのですよね。中期における中心部の遺跡ですけど、それの規模とか、継続性というものですが、その周辺の旧練兵場遺跡などと比較してどうであったのか、簡単に触れていただきたいのですが。

森下　地理的にみますと、金倉川に沿って弥生時代前期の遺跡が点々とある、中期の前半位まではそれぞれ続いているようです。後半になってきますと、やはり土器は出ない。何処に集落が行ったかということになるのですけれども、こちらの山裾のほうに動いて行ったと、結構頻繁に移動するような、頻繁といっても毎日移動するようなものではなくて、何十年か位経つと違う土地条件の所に動く。言ってみればそういう自然条件に左右されたかたちでの制御のありかた、水田もある程度作られる場所も限られるというような状態だったのかも知れません。

丹羽　ありがとうございました。周辺部の社会と地理的な平野の中央部の社会の差というものがこの時期に現れたようであります。周辺部に大きなムラ、安定的なムラ、こういうものが中期以降形成されるようになったということでございますけれど、これは先程申しました古墳時代前期に周辺部に4つの前方後円墳群が形成される、ということにつながっていくのではないかと思われます。すなわち周辺部に安定的な大きな集落、そこから大きな権力がその後形成されていったのではないか。或いは形成されるその基盤が求められるということであります。そこで中期になりますと、青銅祭器を用いたお祭りがこの丸亀平野一帯でも、盛んに行われるようになるわけなんですけれども、そこで信里さん、青銅祭器を用いたお祭りとクニの関係について、あるいは青銅祭器のお祭りの展開からクニがみえてくるのかどうか、その辺をお話していただければと思うのですが。

信里　旧練兵場遺跡周辺からは、銅鐸や中細銅剣などの青銅祭器が見つかっていることがお分かりいただけたと思います。ただこれらの青銅祭器は、讃岐では集落から離れたところで見つかりますので、その時期がいつであるとか、集落との関係はどうかといったことがなかなか捉えられ難い訳です。今回は、これらの青銅祭器と旧練兵場遺跡が密接に関連していると考えたのですが、それには次のような考えがあるからです。当時の社会でいいますと、この青銅祭器は土器などの遺物と違いまして、製作技術や原材料の入手から、希少性があったと思われます。また、一部の青銅祭器は旧練兵場で製作されていた可能性がありますが、これらを他地域から入手するとなるとすべての集落が保有していたとは考えがたいので、ある程度拠点的な集落で保有していたのではないか、ということが考えられます。それと、青銅祭器類（特に銅剣）の形式が中期から後期まで連続することと、丸亀平野で旧練兵場がほぼ時間幅の継続性を持つということからなのです。

そして、次にこの青銅祭器類を使ったマツリが一体どの程度の範囲、また、どの程度の集落が結集した状態で行っていたかということが問題です。例えば、讃岐という括り方が弥生時代に適切かどうかわかりませんが、それぐらいの範囲でマツリを行ったとかいうことですね。また、香川県内で見られる丸亀平野・三豊平野・高松平野・長尾平野などといったような小・中規模河川や山地などによって画された地形的な単位でマツリを行っていたか、あるいはこの各平野を分割する範囲だった可能性もあります。

そこで、香川県内の青銅器の分布を見てみたいと思います。これを見ますと、時期・器種を問わなければ概ね各平野に対応する形で青銅器が存在します。しかし、この中で平型銅剣と呼ばれる青銅祭器の分布を見ますと、県内でも西讃岐にまとまって分布します。また、旧練兵場遺跡のある丸亀平野では、一遺跡を除いて土器川を境に西岸の平野南西部地域にまとまって分布しています。三豊平野にも分布していますが、旧練兵場遺跡周辺ほどではありません。

やや大ざっぱな話ですが、これらから旧練兵場遺跡を中心とした、ここではクニの範囲を丸亀平野南西部という地域を想定できると思います。

丹羽　ありがとうございました。この平形銅剣の分布から善通寺を中心とした地域に、ある社会的なまとまりそれはムラをこえたまとまりとして考えた方がよいですね。そういうまとまりがあるということですが、何故、この地域だけ平形銅剣が出るのですか。

信里　先程も触れましたが、平形銅剣は銅鐸や中細形銅剣に比べて弥生時代でも新しい時期を具体的にいつとは示すことができませんが、弥生時代終末期に位置づけられる観音寺市の一の谷遺跡で見つかっている平形銅剣が、祭器としての役割を忘れ去られた状態で廃棄されていることを考えると、弥生時代後期でも前半から中葉にぐらいに平形銅剣を使ったマツリが行われていたと思われます。旧練兵場遺跡周辺では、この古い祭祀形態に固執していたのかもしれません。

丹羽　他の地域では、青銅祭器を祭るお祭りはやめたということですか。

信里　これは青銅祭器をつかったマツリが当時の社会においてどのような意味合いがあったのかということと、どのような祭祀形態でマツリを行っていたのか、集落内でどのような人間がその祭儀を取り仕切っていたのかが問題となると思います。また、他地域では青銅祭器に代わるモノを選択した可能性があります。これは、ほかの墳墓などの遺構や、舶載された可能性がある鏡などの遺物の分布も射程に入れて検討する必要があります。

丹羽　それ以前の中期の丸亀平野を見ますと、青銅祭器は各地から出ていますよね。銅鐸だったら宇多津の青の山ですかね。綾歌の方では陶ですか。それから、もちろん善通寺からも出ている。多度津は出てないですけどこれから見つかるかもしれませんね。要するにお祭りしていたわけですね。それが後期に入ると信里さんの見解では、善通寺域以外ではもう青銅祭器のお祭りをやめてしまったと、善通寺だけが行っていたということですけれども、丸亀は全体の青銅祭器の祭りが、善通寺の所でされたというふうには考えられないのですかね。

信里　この問題は青銅祭器の分布だけではなく、先程言いましたが他の鏡などの遺物の分布や、他の儀礼行為や生産・流通といった側面から集落間の結びつきを検討する必要があります。現時点ではこの作業はまだまだ不十分ですので、先程丹羽先生が言われたようなことも考えられます。

丹羽　丸亀平野全体が、祭りを同じくするような祭祀同盟というものでまとめられるということは、どうもなさそうだというお話でございます。青銅祭器にあまり執着するわけにはいかないのですが、一つお聞きしたいのは善通寺の地域でもブロックに分かれていますよね。我拝師山と瓦谷と陣山ですかね。こういうありかたは、地域社会にたいしてどんなふうに考えられますか。

信里　私の資料で図16の下側に我拝師山・瓦谷・陣山という3箇所に青銅祭器の埋納地点を示しています。ど

うして3箇所もあるのかということですけれども、旧練兵場遺跡とこれらの青銅祭器が結びつくという私の考えは先程の話の通りです。また、旧練兵場遺跡の、大きく各微高地単位で集落が分かれているのはお分かりいただけたと思います。この3地点の分布を旧練兵場遺跡内の集団にそのまま読み替えることも可能なんですが、私は次のような想定をしたいと思います。

旧練兵場遺跡内の各微高地単位で生産活動をしていて、遺跡内に各生産部門が集中することは無いということは私の発表の通りです。まだ遺跡内からは各微高地の集団を包括するような中心的な施設は見つかってはいませんが、これだけ過度な「集住」ともいえるような状態であったことから推定すると、当然利害関係などの諸問題を調整する首長のような存在も想定することができると思います。私はこのような人物が青銅祭器を使ったマツリを執り行ったと考えますので、旧練兵場遺跡の集団内で埋納地点を区別していたとは考えません。では、どうして3つの地点があるのかということですが、その埋納地点と旧練兵場遺跡との位置関係を見ていただきたいと思います。これを見ますと、青銅祭器埋納地点が、旧練兵場遺跡と他の集落との連絡通路といえるべき場所に位置すると見ることもできます。旧練兵場遺跡の領域の外縁地帯ともいうべき場所です。

丹羽　ありがとうございます。要するに、広い地域社会の境界に埋納すると、それを地域社会の守護神というふうな、青銅祭器の位置付けということになりますか。この善通寺の地域では、3つのグループに分かれてそれぞれが青銅祭器のお祭りを行っていたということにせよ、青銅祭器の展開、丸亀平野での展開からは善通寺地域にムラを越えた、ムラをいくつか束ねたものを更に越えたような広いまとまりが想定できるのではないかと思います。大分、クニに近づいてまいりました。そこで、後期に移ってまいりたいと思います。先ほど、旧練兵場遺跡の住居あるいは掘建柱建物群の展開を森下さんの方からお話されたのですけれども、それとクニの3要素についての関連、関係があるかないかということを併せてお話願えたらと思います。

森下　発表の中で不十分な部分をちょっと補足させてもらいます。竪穴住居が最初円形から多角形が出てきて、そして四角になるというお話をしました。もう少し細かくみてみます。図22としております。中期後葉、紀元前100年から0年位の時期の遺構分布です。丸い竪穴住居が主体ですね。この段階では密度がそれほど多くないという話をしました。次でも同じような形、ただ右下の研修棟調査区という所があります。これは、国立病院の中の調査区なのですけれども、そこでは倉庫と思われる掘建柱建物が、ややまとまる傾向にあるというのは注目しておかなければならないかと思います。これについてはまだ狭い範囲の調査なので、今の段階では何とも申しあげられないということです。以上が後期前半、だいたい紀元0年から100年位の時間の幅の中での遺構の分布です。図24になりますと多角形の住居が出てきます。前の後期前半の段階から集落域の広がりが窺えます。保育所調査区というのが国立病院の一番北側の端にある調査区でして、そこで住居が密集し始めます。彼ノ宗調査区、笹川さんがおっしゃる彼ノ宗遺跡ですが、そこもやはり一番北の方まで竪穴住居が広がってくるということです。竪穴住居の大、小のセット関係もこの段階まで続きます。終末期になると発表の時にも申しましたけれど、まず住居の大きさとと方向が揃ってきます。後期前半段階には掘建柱建物はかなりバラバラの方向を持っています。住居も若干楕円形を呈し、その主軸も揃っていません。やはり方向が揃うというのは終末期の段階で、大きさもだいたい一辺4mから5m位の住居ばかりになってまいります。終末期の段階でもう一つ、保育所調査区という国立病院の中の調査区と、左側にでています彼ノ宗遺跡（調査区）というのは、直線距離で250m以上離れているのですが、別の微高地に存在する調査区にもかかわらず住居の方向が一致してくるというところは、非常に重要なことではなかろうかと思います。つまり微高地を越えてでも、そういったような日常的な住居まで含めて一つ統制されたような在り方というのは、やはりそれらを強制する力が必要なのではなかろうかと思います。同時に倉庫と思われる掘建柱建物が後期後半からなくなります。それも一つ重要なことだろうと思います。

丹羽　集落の住生活と申しますか、住居を設ける、あるいは掘建柱の建物、倉庫と思われますが、そういうものを建てる時においてそれをコントロールするような大きな力が、後期の後半位から明らかな形となってきたということでございます。それと先程おもしろいなと思ったのは、後期の終末でありますけれど、大型の住居は1棟になってしまうのです。調査された所では1棟でその他24棟は小型のもので、以前の小型のクラスより規模が大きく、大型1棟対小型24棟という構成になっておるわけでございますけれど、それ以前は大型のものと、小型のものに数にそれほど差がなく、住居の分布にいたしましても大型のものと小型のものが、ブロックを作って集落の中に分布するという形であったわけですね。そういうムラをコントロールするという力が明らかになってきたということと、住居の構成に大きな変化がでてきたと、これらは現象としては異なるものでありますけれども、それを導き出したものというのは、やはりここに権力の存在、そういうものが顕在化してきた歴史の流れであると思われます。そこで、次に墳墓あるいはその他の祭りの展開でクニの3要素との関係を、これは全員の方にお話願えたらと思います。角南さん、先に墳墓についてでありますけれど、中期からの流れからでも結構ですので後期の墳墓の在り方お話していただきたいと思います。

角南　善通寺周辺では、中期の墓の様子はよくわかっておりませんので、後期の話をさせていただきますが、森下さんの資料図28に、時期別に墳墓という項目がありましてこれを使って説明させていただきます。後期の後半という段階で仙遊遺跡の箱式石棺というものがありまして、皆さんの発表の中であったようにこれは大人の墓だということが考えられます。それに対して下にあります土器棺、これが旧練兵場遺跡、稲木遺跡等で見つかっているものなのです。これは土器棺の中から子供の歯が出ておりまして、一部例外はありますけれど6才から7才位までの子供を埋葬したであろうというふうに考えられております。これを時期別に見ていきますと、後期の後半段階には大人の墓も子供の墓も集落内のべた地にあるという状態がみてとれるのですが、後期の終末期の段階になりますと、大人の墓が香色山とか王墓山の下層のように少し山の方へ上がっていきます。これに対して彼ノ宗遺跡等で見つかっている土器棺は集落の中に残るものもあります。そういうふうに大人と子供の関係、つまり子供を排除するという観点からみますと、大人の墓に伴って香色山のように山に登っていく子供と、集落の中で残されて排除される子供とに区分されることがみてとれるのではないかと思われます。

丹羽　ありがとうございます。弥生時代終末になって山に葬られる子供と、里に葬られる子供に区分がでてきたということでありますけれど、大人の方の区分はどうですかね。

笹川　大人の方でも全ての大人が同じように埋葬されることになりますと、膨大な数の墓が作られているわけで、これまでに確認されている大人の石棺墓は平野部でもいくつかあります。けれど、旧練兵場遺跡を中心にその南の方に先ほど聖域視してるという有岡地区の方を見ていきますと、角南さんの方からもお話がありましたが、香色山の山頂部の石棺墓群で3基確認されております。小児壺棺墓も1基。それから王墓山古墳の丘陵部で16基見つかっておりますけれど、実はこの他にも王墓山古墳を作るとき、破壊されているものが数基あったらしいことが確認されております。もう1つ注目できますのは、更に南に下がった、参考図6のほうに関連資料をいれております。左上の方を見ていただけたらと思いますが、旧練兵場遺跡の中で(1)としております仙遊遺跡、ここでは残念ながら小児壺棺の3基と成人とみなされる石棺1基しか見つかってないので、成人の集団墓かどうかというのはわかりません。しかも、その仙遊遺跡の石棺の全体が特に複雑な模様で装飾されているという点からみて非常に特異な墓である可能性はあります。集落を出ていく墓としては、(2)にあります香色山の山頂部の石棺墓群。(3)の王墓山古墳の脇にたくさん並んでおります石棺墓群、それから実は最近調査されていないのですが、古く記録に残っているものとして、大麻山の中腹部にあります標高200mを超えるような所にあります(4)大麻山シスト群というのが知られています。ここには、数十基の石棺墓群があったということが記録に残っていまして、こ

こからはぼう製内行花文鏡が副葬品として入れられているという石棺が確認されていると伝わっています。おそらくこれらは、集落の中でも持ち物からいって特定の階級の人の墓と見た方がよいのではないかと思います。更にこれから上がった所にある野田院古墳とシスト群の間には他の墓が全く認められませんので、このシスト群が形成された後に野田院古墳の所に、突然非常に大きな墓が現れてきますから、まずある程度選ばれた人たちの墓が特定の所にできるようになって、更にその中の特に限られた人がその上に大きな墓を作っているというふうに考えています。

丹羽　ありがとうございました。子供は実は大人について山に上ったと、こういうことでありますが、重要な点はそういう集落の中から特別な人々、そういうものの存在がこの時期に出てきたかどうかはわかりませんが、存在することが墓の作り方によって明らかになってきたということでありますし、それが一代一代で交代するものではなくて、親から子へとそういうふうに繋がっていく、血統をたどっていくというか、そういうありかたをするということが、特別な子供が特別な大人と山の上へ葬られるということからわかる点です。そこに葬られた人々というのは、集落の中でも特別なクラスの人々であるということですけれど、集落を支配、コントロールするのは、今までみてきたところによりますと、それは地域社会もコントロールする人々であったと、いわゆる権力者であったということが言えるかと思われます。クニの3要素の1つでありますその権力について、その大きさというのはそれほど大きなものではなかったと思われますけれど、はっきりしたかたちで弥生時代の後期の後半から終末にかけて姿を現したということであります。それ以前にも存在したと思われますが、はっきりしたかたちでこの時期にでてきたと思われます。何故、この時期にでてきたかということ、それからまた更にこの後善通寺の地域では野田院古墳という前方後円墳が突如として出現するわけでありますが、今までの話の流れからすでに皆さんは、理解していただけると思いますけれど、こういう集落の中の特別な人々、そういう人々のうちの1人が何故野田院古墳という、突如として現れたそれまでの弥生の選ばれた人の墓でも考えられないほどの大きな、また特異な形の墓に葬られたかということが問題であります。ここには、非常に大きな断絶があるわけです。この断絶、開きというものが何によってもたらされたのか、地域の生活の中からやってきたのか、外からの力、政治的な緊張、そういうものから地域を支配する人々に大きな変革をせまるようなものとしてあったのかということでありますけど、これは今後とも古墳時代の始まりの問題として、研究されていくところであろうと思います。以上、旧練兵場遺跡を中心としたこの丸亀平野の地域に弥生時代にクニがあったかどうかということを検討してきたわけでありますけれど、弥生時代からの流れ、古墳時代は1つの答えであると、弥生時代からの歴史の流れの答えといたしますと、古墳時代的な在り方というのは、弥生時代の後期の後半には既に出来上がっていたのではないかと考えられるわけであります。それから更に中期まで遡るかどうかということは、これから更に調査、研究する必要があるわけでございます。ただ、今日みてまいりまして皆さんもそうお感じになられたようでありますけれど、クニと申しましても実際その内容はよくわかりません。全体の日本の歴史の流れの中で、クニがあったとしたら、この旧練兵場地域を中心に位置づけた時に現在のところその可能性が大いにあるという程度であります。仮にあったとしたらどんなクニであったのか、どんな権力の性格であったのか、その広がりはどうであったのかということは尚、そのカーテンの向こうでよくわからない状態であるわけです。今後、旧練兵場遺跡をはじめとする各遺跡の調査、研究によってこういう問題が明らかになっていくと思われます。そういう意味で丸亀平野、及びこの善通寺の地域の発掘調査、並びに研究に期待したいと思うわけであります。以上がシンポジウムの結論ということになります。

旧練兵場遺跡

平成13（2001）年1月

発行　善　通　寺　市
編集　（財）元興寺文化財研究所
印刷　共同精版印刷株式会社